直木三十五全集

12

直木三十五全集 12

中短篇小說集 上

江苏工业学院图书馆
藏书章

示人社

直木三十五全集第12巻
平成三年七月六日発行
編纂協力　直木三十五全集刊行会
発行者　宗野信彦
発行所　東京都文京区水道一―九―一
株式会社　示人社
郵便番号　一一二
電話　東京三八一二―二四一三
印刷　モリモト印刷株式会社
製本　イワサキ・ミツル
装幀
落丁・乱丁本はお取替致します

本文及び口絵写真は改造社版直木三十五全集
第12巻（昭和９年11月20日発行）を用いた。

第十二卷目次

鍵屋の辻　一七
逢ひに奈良行く　三〇
夫人横行　三九
新譯浮世床　四九
觀音の手　六一
新訂雲母阪　七一
細聞雲母阪　九三
おさいの場合　一〇二
亂れ柳女仇討　一五〇
三人の相馬大作　二〇三
ある義士の妻　二〇八
討たず斬り　二二六
破れ勤王鍋釜仇討

仇討醉三昧　二六一
輕輩被斬事　二七四
富貴は討たず　二九六
小者まがつみ　三二九
娘よ　婿よ　三三八
重妻討たず譚　三五二
貞　女　三七九
大野九郎兵衛の思想　三九〇
寺阪吉右衛門の逃亡　四〇八
金　が　敵　四二二
子は子でも　四三六
免許狀事件　四五九
雨　四七〇
日本駄右衛門　四八一
近藤勇と科學　四八五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中短篇小說集 上

鍵屋の辻

一

張扇から叩きだすと、「伊賀の水月、三十六番斬り」荒木又右衛門、源義村――琢磨兵林による、秀國、本當は保和、講だけでも一寸これ位ちがつてゐるが――三池傳太光世の一刀をもつて「バタ〳〵」と旗本の附人共三十六人を斬つて落すが、記錄で行くとこの附人なる者がたゞの二人になつてしまふ。その上困つた事にはこの天下無雙の荒木又右衛門が背後から小者に棒で腰の所を撲られてゐる。琢磨兵林――これは著者が鳥取に渡邊數馬を尋ねて行つて書いたものと稱してゐるが時々誤のある實錄物だ――だと、これがもう一つひどくなつて頭を二度槍で撲られてゐる。とにかく柳生十兵衛取立の門人一萬二千人――但し講釋師の調査――の中から、只一人の極意皆傳といふ又右衛門が小者輩に腰だの頭だのを撲られては恩師十兵衛に對して甚だ申譯の無いことであるし、第一三十人も御負けをつけて贔屓にしてくれた講釋師に對しても全く濟まぬ譯であるが、どうも事實だから曲げる事もできない。尤も芥川龍之介に云はせると

「そりや君、又右衛門が棒だと知つてゐたから撲らしておいたのだよ。」

と說明するがこれは、氏の機智以外に面白い解釋である。棒位なら時として撲らしておいてもいいといふのは武術の心得の一つである。

宮本武藏の二刀流を傳へた細川家の士に都甲太兵衛と云ふ人がある。一日街を行くと人が集つて騷いでゐる。聞くと

「角力取らしい男が人を斬つて、あの空屋へ逃込んでゐるが捕へる手段が無くて困つてゐる。」

と云ふのである。

「何か壁を壞す物があるまいか。」

と聞くと、杵をもつて來た。太兵衛はそれで壁へ穴をあけると、のそ〳〵と尻から先へ押入つていつた。いかさま不思議な入り方である。太兵衛が曲者を捕へて人々に引渡

した時に

「尻から入るは、何うした譯で御座りますか。」

と聞くと

「あいつめ異な事をする奴だわいと、呆んやり見てゐたからすぐ捕へる事ができたのだ、それに尻なら少々斬られたつて大事が無いからな。」

と答へた。この尻の逸話から推すと、又右衛門の腰も「棒なら大事ないからなあ。」

と芥川說がちやんと理由づけられる事になる。然し尻でも腰でも切られぬに越した事は無い。ただ尻から入る機智、尻なら少々斬られてもいゝといふ覺悟は、武術の奧儀を腹に包んでゐる人にして始めて出る考であり、出來る覺悟である。そして都甲太兵衛は對手を知つてゐたからである。もし次のさう云ふ場合にも彼は矢張り尻から入るかと云つたら、恐らく愚問だと笑ふだらう。時には壁を全部こはしもするだらうし、時には默つて通りすぎるかも知れない。機により變に應じて、それ〴〵に處して行くのが劍の極意である。伊東一刀齋の「間」と說明してゐるのも此處である。事に面して何う處して行くか。一瞬の「間」に當つて腹ができてゐると「尻を斬らして捕へ」もするし「腰を撲らして」强敵を倒しもするのである。「間」はただ劍と劍とを交へてゐる時の「隙」だけでは無い、あらゆる突發的出來事に面した時の刹那の「間」であつて、これにちやんと處して誤らないのは「出來た腹」のみである。さうしてこの腹は劍からも入る事が出來るし禪からも入る事ができる。多くの劍客が禪に篤く所謂劍禪一致の妙など云ふ言葉をも喜んだものである。勿論文藝からでもいゝし、女買ひからでも入れるし、繪からでもいゝ。武藏が繪畫も劍も究極は一であると云つたがこの意味である。

又右衛門の師、柳生但馬守宗矩などはこの點に於てその妙境に到達してゐる人である。禪でも心の無を重んじるが劍も心を虛くする事を大切としてゐる。無刀流とか無念流とか無想劍とか無を大事にした事は多い。

「打太刀にも、程にも、拍子にも、心を留むれば手前の働き皆脫け候て、人に斬られ可申候。敵に心を置けば敵に心をとられ、我身に心を置けば我身に心をとられ候—

――是皆心の留まりて手前の脱け申により可申候」

と澤庵禪師の「不動智」にあるが、無念無想の境にあつて敵に應じて無より出、無限に働くのを極意としてゐる。平たくいふと、敵の眼に心を留めると、太刀の方が留守になるし、太刀のみに氣を入れてゐると、脚の構へが拔けるし、一人に心を留めると、背後へ廻つた敵に困るし前後へ氣を配れば左右が粗になる。といふやうに到底心を何物にかに留めては、留切れないから、こつちが「無」になつてしまつて對手を見ない事にするのである。そして敵から與へる「間」にこつちが働いて行くのである。「無」になる爲めには勿論生死を出てゐなくてはならぬ。何時でも死んでもいゝ腹は一番に結つておかねばならぬ物である。武藏に見出された時の都甲太兵衞が、細川公の前で武藏から

「平常の覺悟は。」

と聞かれて

「いつも死の座に居るつもりしてゐたが、近頃その死といふ事も忘れた。何も云ふ事も無いが、さう聞かれると、かうでも返事するより外に覺悟は無い。」

と答へると、武藏が

「これが劍の極意と云ふもの。」

と云つた話がある。宗矩の高弟である又右衞門も多少この邊の事は心得てゐたらしい。腰の一件も、强敵櫻井半兵衞を斬倒してゐた時だから

「腰ならいゝ。」

と撲らしておいたとも云へる。少くもその腰を撲つた小者を、刀で拂ひはしたが斬らなかつた所を見ると對手にせなかつたものらしい。

「危い〳〵、傷しちやいけないから退け〳〵。」

位は云つたかも知れぬ。――と、尤もこれは又右衞門を贔屓にしての說明で、本當は油斷の隙を撲られたのかも知れない。

二

「主人、朋友の敵は其義の淺深に可依也、我子並に弟の敵者不討也。」

と「勇士常心記」に出てゐる。弟源太夫の敵として又

五郎を討つと云ふ事は當時の武士の常識から云つて出來ない事である。それを荒木又右衛門までが助太刀に出て、天下の評判を高めたのは、弟の敵以外に「上意討」の如くなつてゐたからである。又五郎を旗本の安藤四郎右衛門——講釋の阿部四郎五郎——が隱匿して池田公に喧嘩を吹掛け

此度は備前搦鉢底拔けて、池田宰相味噌をつけたり

と云ふやうな落首まで立つ位になつたから意地として池田忠雄公は又五郎を討たずにをれなかつた。それで手强く幕府へ懸合つて老中共も持餘してゐる時、毒殺だと噂された位急に死んでしまつたのである。死際に

「旗本の面々と確執を結び、不覺の名を穢し、今に落着相極らず死せん事こそ口惜しけれ、依て殘す一言あり、我れ果ても佛事追善の營み無用たるべし、川合又五郎が首を手向けよ、左なきに於ては冥途黄泉の下に於ても鬱憤止む事無く。」

と遺言した位だつたから、數馬の決心も固くならなくてはならぬし弟の敵であると共に主君の命によつて討つ所謂「上意討」も含まれてきたのである。

寛永九年三月

「川合又五郎と申す者は一夜の宿を貸し候とも二夜と留置き候者は屹度曲事に行はるべき者也。」

といふ御觸れが出て又五郎は江戸に居られなくなつた。これは一方の池田公が暴死したから、旗本を押へる爲めの御觸れである。かうなれば四郎右衛門も匿まつておけない。江戸を出るとすれば池田家の誰が討たんにも限らぬし、郡山名代の劍客、數馬の姉聟である荒木又右衛門が助太刀に出てゐるといふから又五郎は危い。寛永の頃の武士氣質は未だ〳〵大したものであつた。荒木と同家中であつて又五郎の叔父に當る川合甚左衛門が浪人して又五郎の爲めに助太刀にくるし、又五郎の妹聟櫻井半兵衛も

「見ず知らずの旗本さへあれだけの事をしてくれるに緣につながる自分が出ぬ法は無い。」

と戸田左門氏鐵の家中で二百石を領してゐた知行を捨てて加はつて來た。この櫻井半兵衛は十文字槍の達人で、霞構へと來たら向ふ所敵無しと稱されてゐた者である。家中

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

では霞の半兵衛といふ綽名の出來てゐる位槍をもたしては名譽の武士であつた。又右衛門が鍵屋の辻で

「半兵衛に決して槍をとらすな。」

とその爲めに孫右衛門、武右衛門の二人にかゝらせたのでも判る。

又五郎は一二ヶ所に匿れ忍んで居たが面白くなかつたり主人に死れたりして結局又江戸へ戻つたらといふ事になつた。江戸御構ひといふものゝ默つて入つてこつそり隱れて居れば旗本の同情があるから判りつこはない。田舍で目に立つてびく〳〵してゐるよりもその方が利口である。頭山滿の邸へ逃込んだ印度人がとう〳〵判らなくなつたり、早大の佐野學が某所に匿んでゐるんだなどゝ噂やら事實やらとにかく東京で有力な人の袖に縋れば、安全な事今も昔も大した變はない。荒木は又五郎の動靜を主として甚左衛門の一止一動によつて知らうとした。甚左衛門も寛永の武士氣質をもつてゐる立派な男である。又五郎へ義理立てゝ浪人してからは又五郎の居る所に必ず附いて行く事にしてゐる。又右衛門は甚左衛門と同家中だから敵の顏を知らぬ上に於て、甚左の意地張つて又五郎の前に立つてゐるのを利用するにかぎる。甚左衛門はさうと知つてゐるがそれを避けて匿れる程の策も持たない。意地一本、眞正直に又右衛門に逢へば討取るつもりでゐる。

三

又右衛門は甚左衛門が奈良へ歸つた事を知つた。探偵してみると何うやら又五郎も一緒らしい。機會としては絕好の時である。然し當時奈良の町奉行は中坊飛驒守秀政といつて旗本の關係者であつた。もし濫りに斬込んで、奉行の手で邪魔が入つたり、討つたとしても後で不利益だつたりしてもつまらぬし、町家では町人百姓が騷立てゝ何んな事が起らぬにも限らぬからそのまゝ樣子を見てゐる事とした。寛永十一年十一月五日の事である、諸說あるが、馬子の口から洩れたといふのが本當だらう。又五郎から馬三頭を六日の夜明けぬうちに廻せといふ註文がきたといふのである。待つてゐた機會がいよ〳〵來た譯である。見張を出して川合方の樣子を見せると、立ちさうだといふ。四人は

支度を整へて一行の跡をつける事にした。鎖帷子と鎖入鉢巻の用意をして、七八町のあとから見えがくれに後を追つて行く。

武士の意地で殺し、意地から匿ひ、意地で來た助太刀である。いつでも對手になつてやるといふ覺悟で、勿論鎖帷子、白晝堂々と槍を立てゝ又五郎は行く。三人に槍三本、鐵砲一挺、半弓一張とちやんと格式を守つて大手を振つてゐるのである。若黨、小姓、足輕、人足合せて二十人、奈良般若寺口から坂道を登り木津から、笠置を經て、笠置街道を進む。六日の午後の二時に島ヶ原へ入つた。日足の早い冬、次の驛まで行くのは危險である。敵をもつ身はたゞの旅人にも增して早立ち早泊りが必要である。それで松屋といふ宿へ泊る事となつた。それを見屆けて、松屋より二三町先の方、馬借勘兵衞の家へ賴んで、又右衞門は見張る事にした。松屋の近くの宿では泊れぬから、仕方無しに馬問屋へ賴んで、腰を卸したのである。七日の明け切れぬ中に荒木はこゝを立つた。これから先は、道を選んで場所をこしらへるだけである。隱れてゐるのによくて敵の逃道の無いそして味方に足がゝりのいい所を選ばなくてはならぬ。探ね〳〵しながら長田川の橋を渡つて五町、上野の城下小田町の三ッ辻まできた。上野は藤堂家の領地で、此處には數馬の知人もゐる。三ッ辻、俗に鍵屋の辻ともいふが突當りが石垣で、右角の茶店が萬屋喜右衞門、右へ曲ると塔世坂といふ坂があつて町へ入る。左角が鍵屋三右衞門、角を折れると北谷口から城の裏へ出る事が出來る。

「此處がいゝ。左右に分れて隱れる事が出來るし、先が曲つてしまへば、後の出來事は判らない。ここで逃路を切取つて二人が前から懸れば袋の鼠に出來る。武右衞門と孫右衞門は鍵屋の角で隱れて敵の逃げるを斬るがいゝ。もし先立つて甚左か半兵衞が來たなら二人でかゝれ。私は最後の奴を斬捨てて下人共を追散さう。數馬はたゞ又五郎一人にかゝつて餘人に振向くな、餘人は又右衞門が必ず一人で食止めるから。それからくれ〳〵も云つておくが、もし半兵衞が先に來たら武右衞門、決して槍をとらすな。半兵衞を斬るか槍持を斬るかとにかく槍を執らさぬ手段をするがいい。斬込む合圖は私が後の奴を斬ると同時だ。三人一度に

目指す者にかゝれ。」

かういふ指圖であつたらしい。十一月七日の早朝だから寒空である。又五郎の一行を待つ爲めに四人は萬屋へ入つた。街道筋の商人はこの寒さにも五時から店を開けてゐる。

「亭主寒いナ。」

と云つて入つた。この四人、そろつて上方者だから寫實で行くと

「おつさん、えらい寒いこつちやナア。」

と云つたかも知れぬが、とにかくこの茶店へかういふ事を云つたと傳へられてゐる。

「親父、ぢろ〳〵と見るナ。怪しくみえるかの。武士と云ふものは敷居を跨ぐと敵のあるものでなう。鎖帷子、ほうら鎖頭巾、どうぢや、かうちやんとした扮をするといゝ男だらうがの、今に喧嘩でもしてみろ、三人や五人ならおくれはとらぬぞ。時に亭主もつと燗を熱くしてくれ。」

又右衞門は濁酒の燗を熱く〳〵と幾度も云つたさうである。茶屋の親仁だから燗の事だけは確かに明瞭と覺えてゐたにちがひない。酒を傾けながら孫右衞門は時々店先へ出て、又五郎らの來るのを見る。長田川の橋からは一本道で橋上にかゝれば茶店からは一眼である。敵がそこへ現れたといふ合圖は孫右衞門が小唄を唄ふ事にしてある。

「いゝ心持になつた、亭主、この羽織をお前にくれてやらう。」

「旦那樣、めつさうもない……」

「ま、取つておけ、少し長いぞ。」

と云つたが又右衞門の身丈六尺二寸と云ふのだからぞろりと着れば踵まであつたかも知れない。

「亭主、わしのもくれやうか。」

と云つて數馬も羽織をぬいだ。これは池田家第一の美男子と稱された源太夫の兄である。遺傳學から云ふと兄より弟の方がいゝ男が多いさうだが、その代り兄は甚六で多少ゆつたりしてゐるから矢張り數馬もいゝ男であつたにちがひ無い。緋羽二重の下着に黑羽二重の紋付といふ扮裝など、如何にも色男らしいこしらへである。

寛永時代の小唄だから頗る悠長な、間のびのした半謠曲染みたものであらう。酒も大してのまないのに、孫右衞門

店先でゆら〳〵唄出した。

襷に、鉢巻、足許を調べて

「亭主、勘定。」

武右衛門と孫右衛門は左角の鍵屋の軒へ忍んで北谷口で逸する敵の退路を切取ると共に先頭に立つ一人を斬る。荒木、渡邊の二人は萬屋の小影に身をひそめて又五郎と附人に當る。

四

寛永十一年十一月七日、辰の刻、今の朝八時である。此時荒木が又萬屋へ戻らうとするから

「何故？」

と聞くと

「イヤ、一文多く渡したのだが、平常なら何でも無いが、かういふ場合だから、又右衛門め周章てたなと思はれるのが残念だから、一寸行つて取戻してくる。」

と云つたといふ話があるが、これは嘘らしい。

長田川の橋に現れた一行、眞先に立つて周圍を見廻しつつ馬上でくるのは又五郎の妹聟で大阪の町人虎屋九左衛門、半町も先に立つて物見の役とある。つゞいて美濃の國戸田家の浪人、櫻井半兵衛とつて二十四歳の若者、使慣れたる十文字の槍を小者三助に立てさせ馬側に氣に入りの小姓湊江青左衛門を引つけ、半弓をもつた勘七、同じく差替をもつた市蔵を後にしたがへて、天晴なる骨柄寛永武士氣質を眉宇に漲らせてゐる。又五郎同じく二十四歳、小者一人、喜蔵といふに十文字の槍をもたせ後ろを押へる人として叔父の川合甚左衛門、四十三といふ男盛り、若黨與作に素槍を擔がせ、同じく熊蔵を從へた主從十一人鎖帷子嚴重に、馬子人足と共に二十人の一群、一文字の道を上野の城下へ乘入れてくる。

荒木又右衛門保和、時に三十七、來伊賀守金道、厚重の一刀、鋼元で一寸長さ二尺七寸といふ强刀、斬られても撲られても、助かりつこのない代物である。虎屋九左衛門の馬は遙かに過ぎ、鍵屋の前を櫻井の馬が曲り、押への甚左衛門が、今萬屋の軒先へさしかゝつた時

「甚左衛門ッ。」

大音聲の終らぬうち大きく一足踏出した又右衛門の來金道、閃くと共に右脚を斬落してしまつた。馬から落ちる隙も刀を拔くひまも無い。タ、と刻足と諸共今打下した刀をひらりと返すが早いか下から斬上げて唇口へ打込んだ。眼にも留らぬ早業である。川合甚左衛門、自慢の同田貫へ手をかけたが拔きも得ないで斃されてしまつた。一口に刀を返してといふが中々尋常の腕でこの返しが利くものでない、「飜燕の刀」と稱して、眞向へ打を入れて、受けんとする刹那、轉じて胴へ返すのが本手で、これはいろ〳〵に使ふのである。打込んで行く勢を途中で止めるのが練磨の腕前だが敵もさる者、それを見破つてその「間」に逆擊されると負になる。飽迄眞向微塵とみせて、ヒラリと返すのだから一流に達した腕で無いと出來ない藝當である。初太刀は大抵受けられるが、後の先といつてすぐの斬返しにまで備へるのは餘程の腕が要る。片脚を落された刹那刀を拔いて次の斬込みに備へる隙位は普通の相手なら有る所だが、名代の荒木又右衛門、斬下すと共に返してきたから、隙も何も有つたもので無い。二太刀で物の美事にやられてしまつた。甚左衛門を倒すと共に、周章て立つ小者共に

「邪魔すなッ。」

と大喝したから、思はず逃出す。

「數馬、助太刀はせぬぞッ。」

と云ひ捨てゝ、二人きりの勝負とし、小者共を追ひ乍ら鍵屋の角から櫻井半兵衛へかゝつて行つた。

この早業は到底數馬には出來ない。荒木と共に走出したが、又五郎も期してゐた所である。供の槍を取るが早いかそれを力にしてひらりと左の方へ降立つ。

「又五郎、覺悟致せ。」

「さあ、參れッ。」

萬屋も鍵屋もバタ〳〵と戸を閉める。小田町は大騒ぎになつた。數馬は又右衛門に仕込まれて相當の腕にはなつてゐる。しかし眞劍の立合はこれが始めてである。たゞ敵に對した時の覺悟だけはちやんとしてゐたらしい。美少年でも流石は寛永時代の武士、中々味のある勝負をしてゐる。又五郎は琢磨兵林によると眞刀流の達人で、弱年の頃「猫又」を退治したと書いてあるが、「猫又」などといふ代物が

怪しいやうに、又五郎の腕も判らない。その證據には源太夫を殺した時に周章て、止めも刺さなけりや、鞘まで忘れて逃出してしまつてゐる。不良少年の强がりで一寸人を斬つては見たが、度胸も腕もさうあつたものとは思へない。それ以後二三年の修業だからまづは數馬と互角の勝負、たゞ槍をもつてゐるだけが强味といふ所である。腕が同じだと槍の方に歩がある。槍の目錄に對して刀の免許が丁度いい位で、一段の差があるさうである。

又五郎は中段に位をとる。數馬は柳生流の青眼、穗先と尖先が御互にピリ〳〵働いて、相手に變化を計られまいとする。二尺餘りを距てゝ睨合つてゐるが、槍の方から仕懸けて行くらしく時々氣合と共に穗先が働く。それにつれて刀も動く。と、閃めいた穗先、流星の如く胸へ走る、數馬の備前祐定二尺五寸五分、拂ひは拂つたが、帷子の裏をかいて胸へしたゝか傷けられた。

「此處だぞ。」

と、數馬は思つた。

「自分は死んでもいゝ、その代りにはきつと又五郎は討取つてみせる、さあ來い。」

又右衞門の仕込んだのは此決心である。身を捨てゝ敵を討つといふ必死の決心である、短い氣合を二三度かけるが早いか、數馬は又五郎の手元へ飛込まうとした。さつと繰引いて突出す槍、胸へ閃いてくるのをそのまゝに片手で槍の柄を握るが早いか、半身を延して片手討の大上段、眞向から斬込んでしまつた。槍は離れて得な武器だが、附込まれては役に立たぬ。放すが早いか飛退つて腰へ手がかゝる刹那、左手に槍をすてゝ片手なぐりに二度目の祐定が打下す。かうなれば受ける隙も無い。咽喉笛へ嚙つきたいやうに憎みを御互にもち乍ら、又五郎も斬らしておいて拔打に數馬の眞額へ斬つける。この拔打は承知の事だから、避けは避けたが氣が上づつてゐる身體はまゝに動かない。耳から頰へかけて一筋かすられる。かうなればもう二人とも本當の刀は使へない。無茶苦茶に呼吸がつゞけば斬合ふだけである。相當の腕の者なら、槍を受けておいて斬込んだ時に、致命傷を與へてそれでケリがつくのだが、腕のちがひはさうも行かない。宮太武藏が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com